

【事業実績】

1. 鉱山系資料館交流事業「鉱山サミット」

2022年11月14日に史跡尾去沢鉱山を会場に総勢30名が集まり「鉱山サミット」を開催した。交流会では、各鉱山系資料館の活動報告がおこなわれた。コロナ禍に見舞われた2020年以降、多くの施設が冬季閉館や開館日数の削減、営業施設の縮小を余儀なくされた。流行収束の兆しが見え始めた2022年度になってようやくイベント等が企画され、活動再開の機運の高まりが感じられるようになった。



「鉱山サミット」交流会



「鉱山サミット」記念講演会

講演会では水田敏夫氏（秋田大学名誉教授）と渡辺 寧氏（秋田大学鉱業博物館長）が、金属資源に関する講演をおこなった。両氏ともに、世界的な金属需要の高まりと日本の経済的地位の低下と関連づけて、資源生産の国内回帰の可能性を指摘した。参加者の質問もこの点に集中し、鉱山復活への関心の高さがうかがえた。

鉱山見学会では、十和田石採掘場と尾去沢鉱山の坑道を見学した。十和田石採掘場は、稼働中の鉱山であり、実際に採掘や加工の様子が見学できる貴重な機会であった。また、採掘のあとに形成される地下の大空間は大変印象に残る景観であった。尾去沢鉱山は、1978年に閉山したあと観光用に整備された坑道であるが、銅鉱脈の産状が観察できるほか、昭和期の採掘・運搬設備や江戸時代の鉱山労働の実態などにも焦点を当てた興味深い展示で構成されていた。両鉱山とも見学会参加者の満足度は非常に高かった。



十和田石採掘場の見学会



史跡 尾去沢鉱山の見学会

2. 資源関連分野のオンデマンド型講義の提供

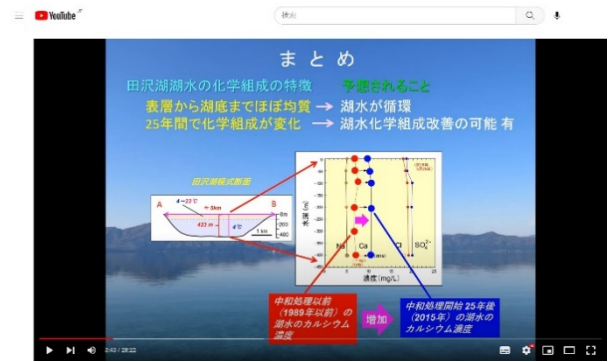
資料館関係者を対象に、資源分野における基礎的な知識の習得を目的として、秋田大学の教員による資源関連分野の6本のオンデマンド型の講義が提供された（図7、図8）。ユーチューブにアップした講義ビデオを視聴する方式にしたが、オンライン視聴に慣れていない高齢者も多いため、希望者には家庭用ビデオデッキに対応した



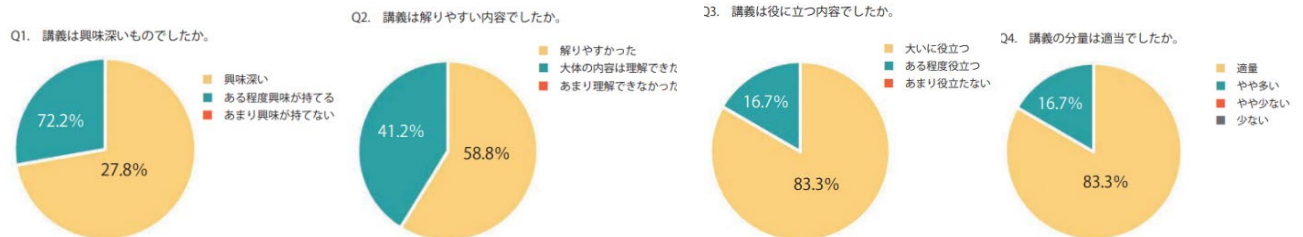
ユーチューブにアップされた資源関連オンデマンド講義の一覧表

DVD を頒布した。

受講者アンケートでは、ほぼ全員から、講義内容は興味深く役に立つと評価されており、多くの受講者のニーズをとらえているといえる。また、内容はおおむね解りやすく分量も適当であるという回答が多かった。講義方法に関しては、自分の都合に合わせて、繰り返し視聴できるメリットが評価された。講義で取り上げてほしいテーマに関しては、各資料館に関連した鉱山やジオサイトなど身近な対象についてもっと詳しく知りたいといった要望が寄せられた。また、開発に伴う環境問題や、現在と未来に目を向けたテーマの必要性を挙げた人もいた。今後、アンケートに寄せられた様々な要望や意見を講義内容に反映させたり、新しい講義を増やしたりしていく予定である。



オンデマンド講義の1スライド



講義受講者向けアンケート結果

図10 講義受講者向けアンケートの結果の続き

3. 博物館標本のデジタルアーカイブ作成と公開

この事業では、鉱業博物館および各資料館の代表的所蔵標本のデジタル画像データを記録した。また、微小サイズの標本や標本の内部組織を X 線 CT スキャン装置で撮影し記録した。これらのデジタルアーカイブを用いて、標本の魅力を伝える 3D 動画コンテンツを制作し全資料館で同時公開した。

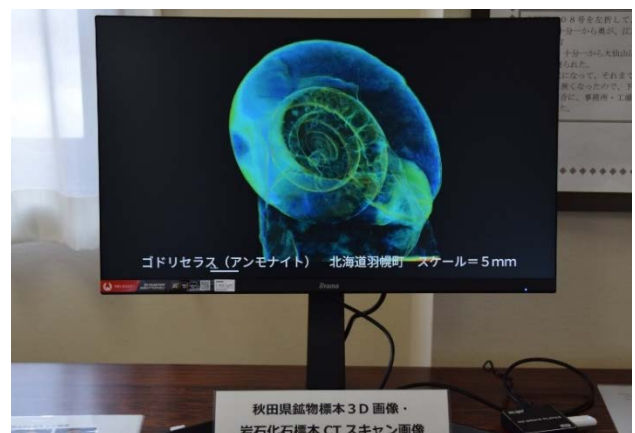
設置した動画コンテンツに対する各資料館担当者の反応は、おおむね好意的であった。新しい展示が加わることについては歓迎されたようだが、専門知識のない人や子供が理解できるような丁寧な説明の必要性も同時に指摘された。



標本3D 動画コンテンツの展示説明会

4. 鉱山系資料館の課題解決へ向けて

地方の鉱山系資料館には、膨大な数の鉱山に関連する資料が収蔵されている。しかしながら、マンパワーが不足していたり、専門性のある職員がいないことから、標本の管理と展示には様々な課題がある。資料館職員に対して行ったアンケートでは、館の活動や標本の管理に専門的指導がほしいとの記述が複数あり、専門的な知識が不足していることに対する担当者の危機意識は強い。中核となる博物館が、地方の資料館との連携をさらに強固にして、資料館活動の基盤となる資料管理や展示方法などについてアドバイスし長期的に関与を続けていく必要がある。



コンテンツ動画(アンモナイト化石のCT画像)